

タイ・チェンマイ市街地の華人廟の分布について

高木秀和

I はじめに

本稿の目的は、北タイの中心都市であるチェンマイ（Chiang Mai）市街地に点在する華人廟および華人施設の分布状況や祭神などの概要を整理し、チェンマイの都市構造と華人社会の特徴を再検討することである（図1）。その際、郷党別の勢力構成を把握するために華人墓地にみられる墓石の分析も行い、数量的データを補った。

経済的中枢管理機能からタイの都市体系を検討した阿部（2001）は、首位都市（プライメートシティ）であるバンコクの卓越を指摘し、バンコクを頂



図1 研究対象地域の位置

点とした垂直的な弱い関係がみられ、しかも地方都市の都市間結合がまったく存在しないと結論づけている。そのなかでチェンマイは、1988年時点のタイ国内で人口、企業の支所数が第4位の都市だとしている。なお、タイ内務省が発表した2020年のチェンマイ県の人口は178万人であり、第5位の位置にある。

しかし、遠藤（1991）が指摘するように、タイ国内の地方都市がその地方の中心的な都市を経ないでバンコクに結びついているが、北タイでは「土地無し層」が拡大することで人口流動性が高まっていることもあり、チェンマイ市を中心に北タイのなかで何らかの地域的連関が形成されつつある。

歴史的にみれば、地方への鉄道の伸長がバンコクとの結びつきを強めたが、地域内でも華商（華人商人）同士のネットワークや、彼らと商品である農作物を生産する農家とのつながりがあったはずであり、多様な結びつきがみられたと考えられる。

タイ鉄道史研究の柿崎（2000）によると、バンコクを基点とする鉄道は北線のランパーンまでは1916年に開通したが、ランパーン―チェンマイ間は山地の区間であり、鉄橋だけでなく長いトンネルを掘削しなければならず、バンコク―チェンマイ間が全通したのは1922年であった。北部まで鉄道が伸長したことにより、これまで河川交通に依存していた商品流通は、チーク材の輸送を除けば鉄道に転移し、バンコクとの経済的統合がより強化された。それに伴い、中国人商人がバンコクから北部へ流入すると、農産物などを商品化して鉄道で輸送し、タイの商品流通を活発化させ、国内の経済的統合を促した。

このように、都市の発展や近代化のなかで中国にルーツのある地方財閥が大きな役割を果たしただけでなく（遠藤2001）、華商のネットワークが伝統的な都市システムや都市構造をある程度規定してきたと考えられるが、華人廟から都市や都市圏の発展過程を考察する研究（桑野2017）は、これまでチェンマイではあまり行われてこなかった。また、タイにおける地理学的な視点からのチャイナタウン研究はバンコクが中心であり（山下1987；2022）、地

方都市を対象とした研究はナコンサワン（高木 2019）を扱ったものなど、研究蓄積は多くない。

そこで本稿は、北タイの中心都市であり、ラーンナー（Lan Na）王国の都として繁栄してきたチェンマイを対象に、水堀で囲まれた旧市街地である旧城を含むチェンマイ市街地にみられる華人廟や華人施設の分布から、華人社会と都市構造の特徴を考察する。なお、チェンマイでの現地調査は2023年3月と9月に行った。

II チェンマイ市街地における華人廟と華人施設の概要

チェンマイ市街地にみられるおもな華人廟と華人施設を、(1) 華人廟と会館、(2) 仏教系施設、(3) 善堂に分類し、それぞれに該当する建物の分布と概要を整理する。それらの位置を示した図2と本文中の符号は対応している。

本稿ではチェンマイ市街地の範囲を、旧城内とピン（Ping）川に挟まれた

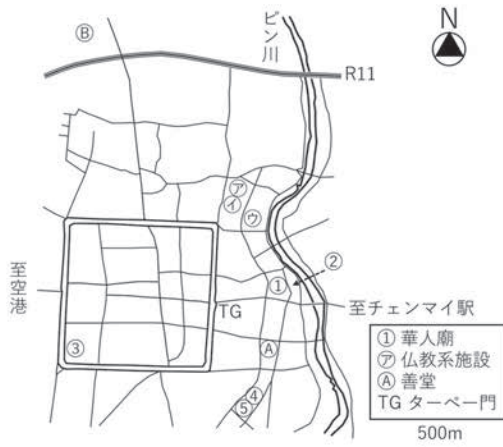


図2 チェンマイ市街地におけるおもな華人廟と華人施設の位置

資料：現地調査により作成。

注：番号、符号は本文と写真に対応。

エリアとし、それに接続するエリアも含むものとする。とくに旧城の東門にあたるターペー（Tha Phae）門（図2-TG）の東側一帯に本稿で取り上げる華人廟や華人施設が集中している。さらに、その周辺部に位置する施設についても、筆者が把握している範囲で補足的に言及する。

（1）華人廟と会館

① 武廟

商務の神として信仰される関羽を祀るチェンマイの武廟（写真1）は、中央市場とも呼ばれるワロロット（Warorot）市場のすぐ西に位置している（図2-①）。この市場の付近は「清邁唐人街（老祖巷）」や「清邁老市場区」とも呼ばれ、チャイナタウンとしての性格も有している。そのなかでワロロット市場は吹き抜け三階建ての市場であり、その天井からタイ語や中国語で「老達叻一百年紀念」（達叻はタイ語の市場 trat の音を写した表記）と書かれたタペストリーが吊り下がっているように、この市場は百年以上の歴史を有している。

同市場の公式ウェブサイトなどによると、復興ランナー王朝チェットト



写真1 武廟（図2-①）

資料：写真1～10はすべて筆者撮影（2023年）。カッコ内の番号、符号は図2と本文に対応。

ン (Chet Ton) 王家の第8代の君主ワロロット (1859-1910) に由来し、その娘でありシャム (Siam, 当時) 国王ラーマ (Rama) 5世に嫁いだダララサミー (Dara Rasmi, 1873-1933) の発案により、元来王家の火葬場だった土地に市場を建設した。その後、第9代君主ナワラット (Nawarat, 1862-1939) は同市場を管理する会社を設立し、その死後には隣接するトンラムヤイ (Ton Lam Yai) 市場 (龍眼市場) とともに開発が進んだ。しかし、1968年に大規模な火災が発生して全焼したが、1972年に近代的な市場として再オープンした。

それに関連し、大阪市立大学東南アジア学術調査隊として1957年から1958年にかけてチェンマイを訪れた梅棹は、現地在住の日本人の案内で「むかしの王家の当主」である中央市場の理事長に接触しようとしたが、不在のためにそれが叶わなかったことを述べている (梅棹1964)。

繁華な地区に位置する武廟の歴史は、市場のそれと重なる。廟内に掲げられる「帝徳廣運」と揮毫された扁額には1924 (民国13) 年の年号が刻まれており、ワロロット市場の黎明期にあたる。また、「萬民所望」の扁額には「泰國佛曆式伍一貳年重新」とあり、市場火災の翌年である1969年に再建されたことがうかがえる。さらに老朽化などにより、1993 (仏暦2536) 年にも改築を行っている。

廟の正面には道教神である協天上帝として関聖帝君とともに清道祖師が祀られる。また、正面向かって右には本頭公と本頭公媽が安置され、正面向かって左には「大王」「王娘」を合祀した靈璽 (位牌) が肖像とともに祀られる。さらに、翰林院に祀られる田府大元帥の靈璽と福祿寿三星の陶製置物が台座上に、五祖神位と書かれた香炉と虎爺、土地公とその神像を祀る神棚が床面に安置される。

武廟に祀られる神仏と郷党の関係をみると、主神である関聖帝君とともにタイの潮州系華人の信仰を集める本頭公の存在が目立つが、福建や台湾の廟で祀られる田府大元帥と虎爺などがみられることから、福建系華人の影響もうかがわれる。しかし、チェンマイ市街地には福建系華人独自の廟や施設は

管見の限りみられない。

そのなかで特徴的な祭神は大王と王娘の2柱であり、チェットトン王家の第7代インタウィチャヤヤノーン (Inthawichayanon, 1817-1897) 王とその配偶者であるテッイパケーソン (Thip Keson, 1841-1884) を祀る。同王の在位中、ラーマ5世は中央集権化の過程で地方権力者から主権を奪い、ラーナーはチャクリー (Chakri) 王朝の支配下に入った。しかし、市場の開発はその名前にもなっているワロロットや、その娘であるダララサミーが関わり、とりわけ彼女は直接的に火葬場の移転に関与した。市場の発展とともに歩んできた廟の祭神として、前述した第7代王と王妃の2柱が祀られている点は興味深い。

② 本頭古廟

チェンマイの本頭古廟 (写真2) は、トンラムヤイ市場とそれに隣接するチェンマイ花市場の南に位置し、ワロロット市場を含む市場街に立地するといつてよい (図2-②)。そしてすぐ東にはピン川が流れている。道路に面して色鮮やかな牌楼や龍柱などが立っているため、外からも目立つ存在である。



写真2 本頭古廟 (図2-②)

廟の歴史を、境内に設置された「清邁本頭古廟歴史記載」から確認すると、この廟はチェンマイ地域で最も古い歴史を有し、地域の華僑はもとより世界各地に広がる華僑の協力のもと建設されたという。廟の記録によると、落成したのは1876（仏暦2419）年であり、ラーマ5世の在位中であつた。しかし、廟の規模が小さかつたために、廟の理事委員らの団結のもと改築されることになった。そして、1996（仏暦2539）年のラーマ9世の在位50年とチェンマイ遷都700周年を記念して廟を改築し、1998年に完成した。

歴史を裏付けるものとして、廟内に掲げられた「聖恩廣被」の扁額があり、1876年にあたる「丙子年秋月」の干支が刻まれており、「歐陽楷虔書敬賀」（ただし虔は「虔」「父」で表記）とある。しかしながら、1936年や改築工事が始まった1996年も丙子であるため、干支だけでは年代を断定できない。

廟の正面には廟名のとおり、タイの潮州系華人の信仰を集める本頭公と本頭公媽が祀られる。また、正面向かって右には觀世音菩薩（觀音娘娘）、左には財神老爺が配され、床面には地主爺を祀る神棚が安置される。さらに入口の両脇には玄天上帝と華陀仙師が、廟内には太歳爺が祀られる。これらの諸神に加え、廟に隣接する建物に2体の黄金仏などが安置される。

桑野は、汕頭出身の潮州人であるこの廟の管理人に対して潮州人の会館の有無を尋ねたところ、「その必要がないからない。今はどこにでも潮州人がネットワークを持っていて、常にそれぞれ個人の家で集まりを持つからいらぬんだ」（桑野2017：206）と応じている。しかし、次に紹介するように、チェンマイでは潮陽同郷会が組織されている。

③ 潮陽公祠

チェンマイの潮陽同郷会（写真3）は、旧城内の南西角付近に位置している（図2-③）。筆者が現地を確認することができた華人廟やその関連施設のうち、唯一旧城内に立地している。敷地には潮陽公祠の建物があり、その前面の広場には「清邁潮陽同郷會會員聯歡晚會」の背景幕がある舞台が設置さ



写真3 潮陽公祠 (図2-③)

れている。門扉が閉ざされていたため潮陽公祠の建物に入ることができなかったが、その入口には「潮陽瀕中國之南地廣物豐代代人才輩出」「公祠建暹羅以北山明水秀處處風光清新」（ただし處は異体字の「庀」「匆」で表記）の文字が掲げられる。なお、夜間には建物のライトアップが行われることもあり、この付近のランドマークにもなっている。

潮陽は現在の広東省汕頭市に位置し、潮州系華人のうち掲陽・普寧とともに榕江流域の華人集団に含まれ、潮安をはじめとする韓江流域に出自をもつ華人集団とは異なる。旧城内に会館を有していることから、チェンマイの華人社会のなかでも潮州系華人、そのうちの潮陽にルーツをもつ華人の勢力をうかがうことができる。

④ 水尾聖娘廟

チェンマイの水尾聖娘廟(写真4)は、旧城の南東に位置している(図2-④)。この廟には、廟名のとおりタイの海南系華人の信仰を集める水尾聖娘が祀られている。また、敷地には廟とともにチェンマイ海南会館の建物と喜慶庁と書かれた屋根付きの舞台もみられる。



写真4 水尾聖娘廟（図2-④）

廟内に掲示された「簡史」によると、1966（仏暦2509）年に多数の海南同郷者の力により落成した。さらに2000（仏暦2543）年にはチェンマイ海南会館がタイ政府により登録された。この廟は海南同郷者が集う場所であり、同郷者同士で団結し、社会貢献を行っている。毎年節日には潮劇（潮州劇）が演じられ、祖先に対して感謝するという。

また、2013（仏暦2556）年に撮影された「泰国北部海南同郷會」の集合写真が掲げられており、この地域における海南系華人のネットワークをうかがうことができる。さらに、ラーマ9世の次女であるシリントン（Sirindhorn, 詩琳通）王女による「泰国海南会館」の書が、揮毫の様子を写した写真とともに掲げられる。

廟内には水尾聖娘と天后聖母（媽祖）の神像と脇侍が祀られるほか、正面向かって右側には本頭公の神像、左側の昭應祠には「清昭應英烈壹佰有八靈神位」の靈璽を安置する。また、廟内には福祿寿三星や布袋などの神像が配され、福德正神の図像が描かれた神棚が床面に安置される。これらの諸神に加え、水尾聖娘と天后聖母の祭壇の脇には、神像を巡行する際に用いると思われる2基の神轎（神輿）も用意されている。屋外である海南会館の建物の

前面には福德祠があり、「福德正神之神位」の靈璽も祀られる。

水尾聖娘廟に祀られる神と郷党の関係をみると、海南系華人が信仰する水尾聖娘や昭應祠だけではなく、潮州系華人の信仰を集める本頭公や、福建系を中心にひろく華人に信仰される天后聖母も祀られており、バラエティに富んでいる。さらに、廟名にもなっている水尾聖娘とともに天后聖母を同じ祭壇に安置し、主神として祀っている点も興味深い。

⑤ 敬徳堂

チェンマイ広肇同郷会の建物と一体化した敬徳堂（写真5）は、旧城の南東に位置し、水尾聖娘廟からほど近い場所にある（図2-⑤）。広肇とは、広州を中心とする平野部と、肇慶を中心とする山間部を合わせた呼称であり、どちらの地域でも広東語を話すために一括りにされる。

この同郷会は1966年にでき、敷地内には2015（仏暦2558）年に50周年を迎えたことを慶祝した横断幕が掲げられている。すなわち、海南系華人の手による水尾聖娘廟と同時期に、同じ通りに面して建設された。

廟の前面には右から「當年太歳」と書かれた巻物を広げた神像、道教の祖



写真5 敬徳堂（図2-⑤）

師像、黄金の大きな関羽像、文昌大帝の写真が祀られている。広東系華人の廟には関羽が祀られるのが「定番」である（桑野 2017）。また、その背後にはナレースワン（Naresuan）大王と2羽の鶏、タクシン（Taksin, 鄭昭）大王の座像なども置かれる。さらに正面向かって右の床面には、福德正神の凶像と神像を祀る神棚が安置されている。

桑野（2017）によると、タイ国内において広東郷党はバンコク以外に、地方三大都市である南部のハジャイ（ソンクラーク県）、東北のナコンラチャシマ、北部のチェンマイに広肇会館を設置している。チェンマイの敬徳堂は、バンコクの恭敬堂に倣ったもので、タイ地方都市の広肇会館のモデルとしての役割がある。現時点では十分な資金が集まっていないために正式な廟を建立するに至っていないが、正式な廟を造る計画をもっているという。

(2) 仏教系施設

① 観音堂

チェンマイ観音堂（写真6）は、旧城の北東に位置し、幹線道路からアクセスしやすい場所にある（図2-⑦）。境内の入口には観音堂と揮毫された山



写真6 観音堂（図2-⑦）

門があり、その正面奥にある観音堂を挟むように左右に三重の鼓楼と鐘楼がそびえる。また、観音堂の入口にはチェンマイ観音堂慈善基金会董事会のプレートが掲げられる。

観音堂の壁面に筆書された「清邁観音堂記」によれば、タイで大乘仏教の教団が誕生すると、1966（仏暦 2509）年に 48 名の発起人がチェンマイに慈善基金会と中国式寺院をつくることを決定した。そして中国湖南省から如慧大師を迎え、1968 年にタイ政府文化部によりチェンマイ観音堂が正式に認められた。観音堂の両脇には住持の遺骨を納めた 2 基の仏塔型の墓があり、初代の如慧大師は 1975（仏暦 2518）年、第 2 代の仁開大師は 1985（仏暦 2528）年にチェンマイ観音堂慈善基金会がそれぞれ建立している。

観音堂の建物の内部は手前と奥の空間に分かれている。手前正面には観世音菩薩、正面向かって右には文殊菩薩、左には普賢菩薩が、さらに奥正面には釈迦牟尼佛、右には薬師如来佛、左には阿彌陀佛が祀られ、薬師如来の右脇には地藏王菩薩と韋駄菩薩、阿彌陀佛の左脇には伽藍菩薩と達摩祖師の像が安置される。また、別棟の福德祠には 2 体の福德老爺、観音堂の入口には「孤魂母子之位」の霊璽が祀られ、観音堂の正面には「南無廿四位諸天菩薩寶座」と刻まれた石板がみられる。

なお、旧城南およそ 3km の地点には観音佛宮清邁道場があり、旧城南東およそ 6km の地点には泰林佛院がある。

② 天福堂佛教社

保玉五中山天福堂佛教社（写真 7）は、旧城北東に位置し、前述の観音堂門前の路地を南に入ったところにある（図 2-①）。境内の入口にあたる山門が 2 基あり、正面の天福堂佛教社の建物を取り囲むように左右には男女別の宿坊がみられる。

天福堂佛教社の内部は手前と奥の空間に分かれている。手前正面には光天佛、正面向かって右には達摩祖師、左には大聖佛、堂内には護法天尊が



写真7 天福堂佛教社 (図2-④)

祀られ、「黄道金光」と書かれた祭壇には黄金の座像と「天福堂老師尊」の図像も安置される。床面には地主神と福德正神像を祀る神棚が置かれる。さらに奥正面には瑶池金母が祀られ、右には観音娘娘と財神老爺、左には地藏菩薩と「大雄寶殿」には法輪を光背とする仏像を中心に複数の座像が安置される。

天福堂佛教社の建物の前面には天地壇があり、その両脇には極楽報恩閣と感天大帝と名付けられた建物、最奥部には報恩祠が配される。感天大帝を祀る建物には、大帝を中心に向かって右には玉皇上帝、左には玄天上帝と脇上上帝を配す。報恩祠は位牌堂である。

2023年9月の訪問時は「盂蘭勝會」の行事が行われていた。極楽報恩閣では入口付近に地藏王菩薩と大士爺の前面に施餓鬼棚が設置され、室内では白衣の3名の僧侶が読経していた。

③ 清華佛堂

清華佛堂 (写真8) は、旧城の北東に位置し、おもに生鮮食料品を扱うムアンマイ (Muang Mai) 市場に隣接する (図2-⑤)。室内に掲げられた記念写真などによると、1964年11月6日に落成し、毎年この日を記念日として



写真8 清華佛堂(図2-㊦)

いる。落成前の1959年に撮影された記念写真もあり、当初から多くの女性たちにより護持されてきたようである。

堂内の正面には九皇佛祖の座像と図像が祀られ、正面向かって右の大聖殿には3体の孫悟空、左には複数の註生娘娘が安置される。床面には福德正神像を祀る神棚が置かれる。また廟の左側には位牌堂である「祈恩祠」があり、別棟のガレージと化した建物には3基の祭壇が設置され、感天大帝として福德老爺、太歳殿には座像、天官賜福として右から「千漢錦吳」と書かれた僧の座像と肖像が祀られる。

筆者が調査した廟のうち清華佛堂のみに認められるのが「清邁徳教會紫禪閣」と名付けられた建物であり、清華佛堂の右側に位置する。徳教は東南アジアの華人社会でみられる新興宗教であり、宗教活動以外にも慈善活動や各種文化活動を行っている。祭壇の前面には「徳徳社諸佛仙真 崇山道長」とある座像が安置される。祭壇の前列の中央には宋大峰祖師と柳春芳師尊、向かって右には道濟佛尊と張玄同師尊、向かって左には呉夢吾師尊と楊筠松師尊の座像が配され、後列には阿彌陀佛の左右に大勢至菩薩と觀世音菩薩の立像が安置される。

(3) 善堂

① チェンマイ修徳善堂

大峯祖師を祀る修徳善堂はチェンマイにもあり（写真9）、旧城とピン川に挟まれた地区に位置する（図2-①）。善堂の周辺にはチェンマイの観光名所であるアヌサーン（Anusarn, 阿努善）市場やナイトバザールなどがあり、繁華なエリアでもある。

一般的にいうと善堂の役割として弱者救済のほか葬儀と埋葬が大きく、堂内には棺が置かれている。つぎに述べる修徳善堂華僑義山荘は華人墓地である。また、チェンマイ修徳善堂では宋大峯祖師聖誕吉祥法会が11月に3日間にわたり行われる点も特筆される。

修徳善堂には隣接して華僑喜慶庁と名付けられたホールがあり、春節盛会としてバイキング形式の食事会が開催される。境内には天地壇があるほか、浄財を募りながら観世音菩薩殿と天后聖母殿を建設中であり、境内の充実化が進行中である。

修徳善堂の正面には宋大峯祖師が祀られ、正面向かって右には観音菩薩と地藏王菩薩、左には関聖帝君と済公菩薩が安置される。大峯祖師と関聖帝君



写真9 チェンマイ修徳善堂（図2-①）



写真 10 修徳善堂華僑義山荘 (図 2-⑥)

を祀る寶座の間の床面には地主神を祀る神棚が置かれる。さらに大峯祖師の前面には複数の弥勒佛祖、観音菩薩の前面には千手観音が祀られる。また建物の入口付近の両脇には、玄天上帝と財神爺、太歳爺と華陀仙師が配され、後者の脇には新たに祀られたと思われる富貴佛祖が安置される。

なお、旧城の南東およそ 4km の地点にはチェンマイ同心善堂がある。

② 修徳善堂華僑義山荘

華僑義山荘 (写真 10) はチェンマイ修徳善堂が管理する墓地であり、旧城の北を走る R11 以北に位置する (図 2-⑥)。交通量の多い幹線道路に近く、チェンマイの旧城からそれほど離れていないため、アクセスしやすい。

この華僑義山荘は郊外の広大な土地を活用した墓地公園であり、チェンマイの上座仏教寺院の境内などでも華人墓を見かけることがあるが、これを上回る規模のものはみられない。敷地内にみられる神仏を祀る施設には福德祠があり、壁面には立体的な虎が描かれ、その前面には男女の神像が祀られる。

Ⅲ 墓石からみたチェンマイの華人の出身地

つぎに、チェンマイ修徳善堂華僑義山荘に並ぶ墓石から、チェンマイの華人の出身地を考察し、郷党別の勢力構成を比較する。その際、造墓の時期や被葬者の性別なども検討する。ただし、墓域が広大であるため、新旧の墓石が混在する任意の一行のみを抽出した。

表1は、墓石に刻まれた被葬者の出身地を中国の省別、地域別に分類したものである。しかし、夫婦墓の場合は夫の出身地と没年のみが刻まれることが一般的であり（片岡 2018）、名前を知ることが可能なすべての被葬者の出身地を把握できないことに注意しなければならない。また、例外的に出身地が刻まれていない墓石が1基みられた。

これらの点を踏まえて表1をみると、総数57（墓じまいをした1基を除く）のうち広東省が50を占め、現在の海南省はわずか3基である。前述したと

表1 チェンマイ修徳善堂華僑義山荘の被葬者の出身地（一部）

単位：基

省	地域	基数
広東 [50]	澄海	18
	潮安	11
	潮陽	8
	普寧	6
	梅県	2
	饒平	1
	揭陽？	1
	その他	3
海南	文昌	3
その他（湖北、雲南）		2
地名なし		1
不明		1
合計		57

資料：現地調査により作成。

注：その他のうち2基は現在の江門市、1基は中山市か。

おり、潮州系華人の出身地は韓江流域と榕江流域に分かれ、韓江流域には潮安、澄海、饒平、榕江流域には潮陽、普寧、揭陽が含まれる。また内陸部の梅県は客家が多い。すなわち、澄海や潮安にルーツをもつ華人が多く、饒平と合わせると30基に韓江流域の出身者が眠る一方、榕江流域は揭陽だと推測されるものを含めても15基となる。梅県はわずか2基である。以上の限られた分析から、広東省出身者50のうち45が潮州にルーツをもち、榕江流域に比べ韓江流域出身者の勢力が大きいことがうかがわれる。

一方、広東省のうちのその他の3基は、墓石の地名と現在の地図を照らし合わせると広肇に該当すると考えられる。また、海南島からやって来た海南人は少ないが、該当する3基のすべてが文昌を出身地としている。

造墓時期は1945年から2010年にかけてひろく分布しているが、1950年代の後半に集中し、とりわけ1957年は15基と最多である(図3)。新たに被葬される人は1960年代に入ると減少し、遺族が墓参りに来なくなって久しい墓石を処分し、近年新たに別の故人を被葬したと思われる例もある。また、没年の年代と墓石の光沢が不釣り合いのものも珍しくなく、老朽化した

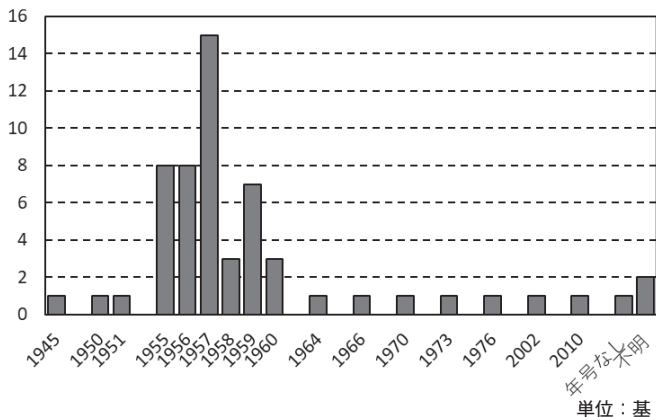


図3 チェンマイ修徳善堂華僑義山荘の墓石の年代(一部)

資料：現地調査により作成。

墓石を遺族が取り換えたものと思われる。調査した列の墓石の配列をみると、同郷者が隣同士で被葬されたり、造墓時期が近いものが固まっているケースが目立つのも特徴である。

さらに被葬者の性別をみると、男女1人ずつの夫婦墓が29基と最も多く、男性1人女性2人のケースも6基みられた。個人墓には男性が多いが、女性が被葬される場合もあり、女兒の墓もみられた。

IV チェンマイの都市構造と華人社会の特徴

本章では、これまでの検討をもとに、華人社会の特徴を加味しながら華人廟や華人施設の分布からみたチェンマイ市街地の都市構造を考察する。

まず、チェンマイの華人廟や華人施設は、旧城とピン川に挟まれたエリアに集中し、市場に隣接して立地していることが特徴である。そのうちチェンマイのなかでも長い歴史を有しているのが武廟と本頭古廟であり、とくに本頭古廟は1876年までさかのぼる。これらの廟はワロロット市場やトンラムヤイ市場に隣接するうえ、鉄道開通前は物資の輸送ルートとしてにぎわいを見せていたピン川にも近く、市場で活躍する華商との関係が示唆される。また、廟の祭神をみると共通して本頭公が祀られており、潮州系華人の勢力がうかがえる。

それに関連し、唯一旧城内に立地するのが潮陽公祠であり、同郷会館の役割を有している。潮州のうち、潮陽は榕江流域に位置する僑郷であり、その勢力の大きさがうかがえるが、限られた修徳善堂華僑義山荘の墓石の分析からは、韓江流域の澄海や潮安が目立った。

そのほかの郷党をみると、海南系華人の会館もある水尾聖娘廟と広東（広肇）系華人の会館もある敬徳堂は、どちらも旧城からやや離れた南東に位置し、1966年に落成した比較的歴史が浅い華人廟である。彼らはワロロット市場周辺に本頭公を祀る華人廟を有し、墓石の数も多い潮州系華人に比べて勢力が小さいことがうかがえるが、独立した廟や会館を有しているという意

味では華人社会のなかでも一定の存在感を示している。

チェンマイの華人社会全体に関わるのが善堂であり、大峯祖師を祀るチェンマイの修徳善堂は潮州系華人と関わる武廟と本頭古廟、海南系や広東系華人と関わる水尾聖娘廟や敬徳堂の中間に位置する。チェンマイの観光名所であるアヌサーン市場などにも近く、華人とローカル市場から発展した観光産業との関係がうかがえる。華人墓地である修徳善堂華僑義山荘は旧城の北にあり、市街地を避けるかたちで R11 を越えた郊外に広がる。

また、仏教系施設はいずれも旧城の北東に位置し、ムアンマイ市場からは近い場所に位置する。そのうち、チェンマイ観音堂と清華佛堂は 1960 年代に落成しており、前述の水尾聖娘廟や敬徳堂の落成と同時期にあたる。どちらも旧城からやや離れた場所に位置するのは、落城の時期がワロロット市場周辺の華人廟に比べて遅れたことが関係するのだろう。また、華人がチェンマイに定着するなかで、郷党別の神ではなく、仏教系諸宗派を信仰する華人の信仰対象として仏教系施設がつくられたと考えられる。

しかしながら、ナコンサワンと同様に路地に中華系の神仏を祀る小祠はほとんどないといってよく（高木 2019）、管見の限りでは旧城と R11 の間でみられた複数の虎爺を安置した小祠がある程度である。

今後の課題として、まず華人による商業活動と華人廟や華人施設の関係を考察し、華商が活躍する都市における華人廟の役割を再検討する必要がある。また、修徳善堂華僑義山荘における墓石の検討では、わずか 50 基余りを対象としたため、さらなる調査が必要となる。さらに、華人がひろく分布しているタイ国内のなかでも、その影響が強くみられる他都市でも同様の調査を行い、チェンマイやナコンサワン（高木 2019）との比較研究をすすめることで、華人廟や華人施設からみたタイの都市構造の分析を試みたい。

文献

- 阿部和俊（2001）『発展途上国の都市体系研究』 地人書房。
- 梅棹忠夫（1964）『東南アジア紀行』 中央公論社。
- 遠藤 元（1991）「北タイ、チェンマイ市の人口成長とその要因」『経済地理学年報』 37-3。
- 遠藤 元（2001）「タイにおける地方小売財閥の形成と展開－タントラーパン・グループの事例－」『経営史学』 36-1。
- 柿崎一郎（2000）『タイ経済と鉄道 1885～1935年』 日本経済評論社。
- 片岡 樹（2018）「タイ国プーケットのパバ墓碑にみる文化的土着化」『年報 タイ研究』 18。
- 桑野淳一（2017）『タイ 謎解き町めぐり 華人廟から都市の出自を知る』 彩流社。
- 高木秀和（2019）「タイ・ナコンサワン市街地の華人廟の分布について」『愛知大学短期大学部研究論集』 42。
- 山下清海（1987）『東南アジアのチャイナタウン』 古今書院。
- 山下清海（2022）「アジアのチャイナタウンを巡る 第七回 タイ、バンコクのチャイナタウン（泰国曼谷唐人街）」『Think Asia』 50。
- Waroros Market (Kad Luang), <https://www.warorosmarket.com/>, 2023年9月閲覧（タイ語）。